
金の閃光のもう一人の義兄Another外伝：Avenger story.

珀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の閃光のもう一人の義兄 Another 外伝：Avenger
story.

【Nコード】

N1892X

【作者名】

珀狼

【あらすじ】

8年前のあの日・・・僕の故郷の街はある強盗団に焼かれ・・・みんなを破壊された

そして僕以外を残して父さんや母さんやみんな死んじゃった

「父さん・・・母さん・・・お姉ちゃん・・・」

お姉ちゃん、みんな・・・僕決めたよ

必ずあの強盗団供を1つ残らず僕が斬り捨てるから

「待っててね・・・父さん・・・母さん・・・お姉ちゃん、僕頑張るからね・・・だから」

そして見ていてね、お姉ちゃん、父さん、母さん、みんな・・・。僕、必ずやり遂げるからね…：奴等への”復讐”を…！

ある日、同じ部隊の仲の良い同僚シグナムに新たに新設される部隊”機動六課”に誘われたヴェナージ

…：彼が加わる事で変わる機動六課の運命とは？

毎週土曜日の亀更新です！！

主人公がチートではありませんがそれなりに強く、原作改変もそれなりにあります。それが嫌という方は回れ右をして下さい

駄文だと思いますが見ていただけると嬉しいです

ヴェナージの設定

ヴェナージ・モルドレイド 男

17歳

身長：162？

髪色：ダークグレイ 瞳：アクアブルー

顔つき：カッコイイ系（シャーリー談）

六課に来る前はシグナムと同じ航空武装隊第1039部隊所属の空戦魔導師

魔法術式は近代ベルカ式でランクはS+ で2等空尉

魔力光はスカーレット 魔力変換資質：炎熱+電気

ある異世界の出身のヴェナージは、8年前故郷の街を強盗団に襲われる

襲撃の際にヴェナージも強盗に襲われるが姉がヴェナージを庇った為にヴェナージは何とか一命を取り留める事が出来た

だが・・姉と両親は、強盗団に斬殺された上、彼の友人達も含めヴェナージ1人を残して街の住人全員皆殺しされたヴェナージは強盗団への復讐を誓った

ヴェナージは助けられた後、検査の過程で魔力量が高い事が判明そんなヴェナージに、管理局は訓練学校入りの話を持ちかける

身寄りの無いヴェナージは訓練学校の話を受ける事にした

訓練学校に入学したヴェナージは、なのはやフェイトと同じく3ヶ

月の速成コースを主席で卒業した後、復讐の為にヴェナージは管理局に入局した
入局後、実戦の中でヴェナージは復讐心を糧にその才能を一気に開花させていく
そして遂には、ある二つ名を得るまでに成長
その後、第1039部隊に転属した
第1039部隊に転属後、同じ剣を扱う者としてシグナムに目を付けられてしまう
その後、会う度に模擬戦を挑まれいく内に仲良くなりシグナムに六課に誘われる

デバイス

ガラドスレイヴ 通称：スレイヴ

ヴェナージ専用：剣型デバイス カートリッジシステム搭載型

ヴェナージが独自に制作した特殊なデバイス。

分類上は、アームドデバイスなので語源はドイツ語の筈なのだが：スレイヴの語源は何故だか英語、制作者のヴェナージはその理由をフレイムや武装の部分に金を使い過ぎて語源やその他の部分は安く出回ってるミッド式の物を採用したとの事

起動後の剣型の基本形態の刀身は輝きを放つ程の美しい黄金色が特徴的

大きさはシグナムのLTと同じ位だがスレイヴは両刃

刀身の黄金は本物の純金が素材の1部に使われている

これはヴェナージの技「雷神一閃」の電撃の流れを良くする為の物

らしい

待機状態は金色の剣型のイヤリング

カートリッジシステムは・以前、シグナムがLTの改良の際に出た古いCSのパーツをシグナムからヴェナージが譲り受けそれをヴェナージがスレイヴ用に改良し搭載した

その為、装填シークエンス等も全く同じとなっている
因みにLTのCSパーツを使っているのでシグナムのカートリッジの使い回しが可能

BJは白/青がメインの色

意外にも、ヴェナージのBJは高町なのはのBJ「アグレッサード」が元になっている

元になっているだけに彼女のBJと共通点も多々ある

41「ヨイチ」

銃型のストレージデバイス

外層はかなり拳銃的な外観をしておりティアナのアンカーガンよりもよほど銃らしい

しかし中身はアンカーガンと大差無い、というよりも術式や外装以外は同型

防御用や迎撃射撃の装備で銃口はアンカーガンと同じく上下2連装式
41はマガジン式カートリッジシステムを採用している
マガジン1つにつきカートリッジは6発装填可能

またアンカーガンと同じくワイヤー付きアンカーを射出することが

出来る

ダブルヴァーカスエッジ

ヴェナージの左右のサイドスカート上部に装備されている武装

円筒形状で片手に持てる程度のサイズ

円錐状の刃の部分は自身の魔力をエネルギーに使用して実体化

それを高密度で固定し魔力刃サーベルとして使用する

刀身は魔力刃で出来ているので誘導弾等、魔力で形成された弾を切り払う事が可能

ヴェナージの設定（後書き）

今回の作品は台本形式ではありません

なので、戸惑うかもしれませんが宜しくお願いします

珀狼

PS・第1話は9時頃には投稿出来ると思います

キャラ設定（六課）

高町なのは（19才）

六課の新人の教導官

単独戦闘が可能な優秀な砲撃魔導師

ヴェナージの天敵、もとい苦手としている女性

その理由はヴェナージ曰く：人の心に何時の間にか勝手に居るタイプの人間で目標の妨げになる可能性が大きいからとの事だが、他にも理由がありそうだ

しかし彼女自身はヴェナージとは仲良くしたいらしくその事を猛烈にアピールしている

フェイト・T・ハラオウン（19才）

執務官であり六課のライトニングの隊長

高速移動からの斬撃による一撃離脱を得意とし、射撃・広範囲魔法も優れた万能型の魔導師

ヴェナージの苦手な女性？2

とはいってもなのは程に猛烈なアピールをしないのでそこまで苦手という訳ではない

普通に接している苦手な理由は死んだ姉とダブって見える事があった為だが、フェイトの容姿はヴェナージの姉とは違い似てるのは雰囲気

最近、ヴェナージの事が気になっている様子

シグナム 外見年齢は19歳

ヴォルケンリッターのリーダー格「烈火の将」という二つ名がある
ライトニング分隊副隊長の1人

近接主体だが割と手数で勝負するタイプ
魔力変換資質「炎熱」を保有その為か魔法や斬撃には炎をともなう
ものが多い

六課でヴェナージの過去を知ってる数少ない人物の1人

ヴェナージに好意を持ってるのが自分の気持ちに気付いていない
模様

八神はやて(19)

六課の部隊長

守護騎士ヴォルケンリッターを率いる魔導騎士
魔導師としては遠距離攻撃、遠隔発生、広域攻撃を得意とし圧倒的
な能力を持っている

ヴィータ

ヴォルケンリッターの内の一人で「鉄槌の騎士」
役職はスターズ分隊副隊長兼戦闘教官

シャマル

ヴォルケンリッターの内の一人で「湖の騎士」
役職は主任医務官

ザフィーラ

ヴォルケンリッターの内の一人で「盾の守護獣」

リインフォースIEI

役職は部隊長補佐／副隊長補佐／前線管制
はやての人格型ユニゾンデバイス

スバル・ナカジマ（15）

役職はスターズ分隊フロントアタッカー

ティアナ・ランスター（16）

役職はスターズ分隊センターガード

エリオ・モンディアル（10）

役職はライトニング分隊ガードウイング
フェイトの保護児童の一人

キャロ・ル・ルシエ（10）

役職はライトニング分隊フルバック
フェイトの保護児童の一人

ヴァイス・グランセニツク

役職はヘリパイロット
六課でヴェナージの過去を知ってる数少ない人物の1人
男同士気が合うのかよく話してる様子が目撃されている

シャリオ・フィニーノ

役職は通信主任兼メカニック
愛称「シャーリー」

ヴェナージと一緒に、デバイスの作成等を手がけておりその関係の
所為でヴェナージとよく話をしている為に六課内の女性局員では仲
は非常に良い

キャラ設定(六課)(後書き)

変化があると更新します 珀狼

story 1

・機動六課：部隊長室

機動六課の部隊長”八神はやて”は苛立っていた
その理由は……

「…遅い、幾らなんでも遅すぎやろッ!?この隊員」

「も、申し訳ありません《いや、シグナムが謝らんでもええよ》
は、はあ…」

新しく来る隊員が予定した時間を大幅に遅れているのだ
その事に怒るはやて、それに対して隊員をスカウトした機動六課の
ライトニング分隊の副隊長である”シグナム”がはやてに謝る
シグナムが謝った事ではやては一先ず怒りを抑える事にした
その後……

「にしてもマジで遅過ぎるだろう」

「本当だね」

「何かあったのかな？」

スターズ分隊副隊長のヴィータそしてスターズ分隊長の”高町なのは”とライトニング分隊長のフェイト・T・ハラウンも遅れている隊員の事を心配する

部隊長室に居るメンバーそれぞれの思いで隊員を待つてる中・・・

その一方で問題の隊員はというと・・・

「¥958になります《はいよ》¥958丁度ですね、ありがとうございます！」

コンビニで買い物をしていた！

隊員は買い物袋を持って外に出ると買い物袋の中から煙草を取り出し1本程口に咥えそれに火を点けて一服する

「ふう、うめえ・・・」

そして隊員は一服しながら通行人を見て思考を始める

.....
???? Side .

僕は煙草を吸いながら通行人を見て思考する

思い浮かぶのは勿論、僕から家族を奪ったの強盗団供の事だクズ

爆乳女の話だと今から配属になる機動六課には八神はやてに加えて
エリート執務官のフェイト・T・ハラオウンも居るらしい、これは
ラッキー

エリート執務官の彼女ならば強盗団クズの情報を多少なりとも持つてる
可能性がある

「これで強盗団クズ供に、近付けるといいが...まあ余り期待をしてないがな...っ」と

「だ、大丈夫です。そ、それよりも爆乳・・・こちらに所属しているシグナム2尉を呼んでいただけますか？」

「それは構わないですけど、失礼ですがお名前を聞いても良いですか？」

小人が僕の名前を聞いてきた

まあ、当然の事だな

「ヴェナージ・モルドレイド」2等空尉です。それとついでに彼女への伝言も良いですか？《はい 構いませんよ》それでは……」

僕は小人にある伝言を頼む

さて…あの爆乳シグナム女はどんな反応をするかな楽しみだ

「それでは呼んで来ますので此処で待っていてくださいね」

「分かりました」

小人が爆乳シグナム女を呼びに行った

それから5分も経たない内に爆乳シグナム女が僕が居る通路の奥に姿を見せる
そしてスタスタと早歩きで僕に接近し……

「誰が！愛しのシグナムちゃん だ！！《ふごっ！？》
／／／
／／／

・・・何時の間にか起動したL.Tの峰で思いつき叩かれた！しかも結構、痛い……

痛みに耐えながら僕はシグナムに話しかける

「ふっ！何だよ！僕とシグナムの仲だろう？《どんな仲だツ！
／／／》一晩、同じベッドで一緒に寝た仲《うわあああ！／／／
《ふっ！》」

「なっ、何を言うんだ！貴様はツ！／／／」

シグナム
爆乳女は再び僕の頭をLTで叩き叩かれた僕は伏せながら倒れる
僕は別に嘘を言った訳じゃあ無いのに・・・過去に僕とシグナムは
一緒の出張任務の時ホテルの部屋が1部屋しかとれずに一緒の部屋
のベッドで寝た事がある
因みに、命が惜しいので変な事はしていない

「いつてな！《自業自得だ／／／》へいへ・・・」

うつ伏せに倒れた僕は起きあがる為に身体を回す
すると偶然、僕の視界にシグナムのスカートの中が見える
因みに、色は・・・

「ふむ・・・《ど、どうした？／／／》今日は黒か《っ！／／／》」
「天誅ッ！！／／／」

シグナムの怒り咆哮の後、僕の意識は闇に落ちた

・機動六課：部隊長室

シグナムの天誅を喰らい意識を失ったヴェナージをシグナムは、そ
のまま部隊長室に襟裏を掴み引き摺りながらヴェナージを運んで行
った

「新任の隊員を連れてきました」

シグナムが何食わぬ顔でそう言う

部隊長室に居るメンバーはシグナム以外の人が立って居ない事に疑問を持ったが・・・それは直ぐに解消された

「ひよっとして手に持って引き摺ってるソレなんか? へはい、主はやて《》」

「ど、どうしたの? 《安心しろ、なのは。罰を受けたただけ》 え?」

部隊長室に居るメンバーが揃って引き摺られてる人物に注目する
シグナムは皆の視線に気付き・・・

「起きろッ! 《うっ!》ヴェナージ、皆に挨拶しろ」

・・・ヴェナージ文字通りに叩き起こす
シグナムの鉄拳を喰らい痛みで目が覚める

「ハイハイ・・・只今、シグナム2尉から紹介されたヴェナージ・モルドレイド2等空尉ですどうぞ、よろしくお願いします」

敬礼するヴェナージだが表情からは面倒くさいという雰囲気滲み出ている

そんな、ヴェナージに部隊長のはやては自己紹介しつつ遅刻の理由を尋ねる

「わ、私が部隊長の八神はやてです。早速やけど・・・どうして遅

刻したんや？」

「・・・寝坊した時に、どうせ遅れるなら面倒くさい式とかも終わった頃に行こうと思ひましてコンビニで立ち読みしてたら何時の間にかこんな時間になってました」

「・・・要するに寝坊なんやな？《はい》はあゝ・・・」

ヴェナージの遅れてきた理由に頭を抱えるはやて
そんな、はやての様子を見てヴィータ達は・・・

「だ、大丈夫かよコイツ・・・」

「た、多分大丈夫だよ！ヴィータちゃん・・・多分」

「そ、そうだよヴィータ・・・多分だけど」

・・・苦笑いしつつヴェナージの事を見るのだった
すると、ヴェナージは、はやてに役職を聞く

「八神部隊長、自分の役職は何でしょうか？」

「ヴェナージ君はシグナムと同じくライティング分隊の2人目の副隊長をお願いしようかな...？《何で疑問形なんですか・・・》いやゝアハハ・・・」

ヴェナージはこうしてライティング分隊の副隊長に任命された...？
その後ヴェナージは、はやてにある質問をする

「八神部隊長《何や？》」
「ヴォラクシア」って知ってます？」

「ヴォラクシア？いや、知らんわ」

「執務官殿は？《私も知らないよ》そつですか…」

「それがどうかしたん？《いえ、別に》？ なら、今日からよろしくな！ヴェナージ君」

「…こちらこそよろしくお願いします」

その後、他の隊長達と挨拶などを交わし六課での初日を終えた

その夜……。

Side・ヴェナージ

・機動六課：ヴェナージの自室

僕は自室で今日の事を思い返す

「…エリート執務官やキャリア捜査官も意外と役に立たないな…」

フエイト・T・ハラOWN執務官に八神はやて・・・期待はずれだったな

条件の中に僕を自由に行動させるを入れて正解だったな・・・でない
と強盗団供の情報が集められないからな・・・幸いこの六課には”お
人よし”が多いから色々動きやすい

その点に関しては、評価すべき点かな？ふふっ・・・。

「さて・・・明日から色々と忙しくなりそうだ・・・フフフフ」

僕の微笑が室内に響くのだった・・・。。。。。。。

story・1 (後書き)

桃子「始まったわね”Avenger.”」

珀狼「……どうして此処に居るんですか？作品違いますよ？」

桃子「私の勝手でしょ？」

珀狼「……もう、いいです）、）、」

桃子「今回のヒロインは決まったの？」

珀狼「今のところは未発表《決まって無いのね》……はい、なので

フェイト

シグナム

なのは

珀狼「この3人から選びます。”金の閃光のもう一人の義兄”でも聞きましたが同表だったので……改めて3人中でお勧めの人が居れば教えてくれると嬉しいです(^^)」

桃子「まあ、頑張りなさい《はい》それじゃあ……今回はこれで」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

story・2

翌日ヴェナージは自分のデスクで事務の仕事をしていた
するとそこに、なのはが2人組の女の子を連れてやって来た

「ヴェナージ君、ちょっといいかな？」

ヴェナージは、なのはに声を掛けられてキーボードを叩く手を止める
そしてヴェナージは声を掛けられた方向に振り向き対応する

「何ですか？高町教官」

「もう、なんはさんでいいよ。みんなそう言ってるし」

「で、何ですか？高町教官」

「にはははは……。そうだヴェナージ君に紹介してないフォア
ードの2人を紹介しようと思って連れて来たんだけど……。いいかな
？《どうぞ》じゃあ……。2人供、自己紹介しよっか」

なのはが2人にさういうと、なのはの後ろに居た2人が前に出てくる
2人は前に出てくると自己紹介を始める

「スバル・ナカジマ2等陸士です」

「同じくティアナ・ランスター2等陸士であります」

「「宜しく願いますッ！」「」」

「ヴェナージ・モルドレイド2等空尉だ、まあよろしく頼む」

ヴェナージは素っ気ない挨拶をすると再びデスクに振り向きキーボードを叩く

そんなヴェナージに対してなのは・

「えつと・ヴェナージ君は他に何か無いのかな？《何がですか？》ほ、ほら！自己紹介とかあるじゃない？《彼女達にしてどうなるんですか？》どうなるって・」

そういうなのに対してヴェナージはキーボード叩きながら説明を始める

「僕は、確かに立場上はライトニング分隊副隊長ですが、仕事以外の時間、僕はある犯罪者を調べるので忙しいので・同じライトニングの隊員でも仕事以外の時間は絡む時事があるかどうか微妙ですよ？それに比べたらスターズ分隊は、話すかどうかさえ怪しいものですよ？なら、この程度で十分でしょう？・さてと」

「何処行くの？」

「調べものです」

ヴェナージは席を立てて何処かに行ってしまった

そんなヴェナージの様子をなのは黙って見送るしか無かった

Side・ヴェナージ

・機動六課内：廊下

事務仕事を終えた僕は廊下に出る

そして先程高町教導官達が自己紹介をした事を思い出していた

「スバル・ナカジマね・・・」

確か陸の部隊長に同じナカジマの性が居たような気がする
だが、僕には関係ないな

「次に・・・ティアナ・ランスター」

彼女はどこか僕に似てる雰囲気を持つてるし気になるな
しかし・・・ランスター・・・ランスター・・・聞き覚えのある名だな後
で調べてみるか

そして僕は自分で顔を険しくしながら最後の人物を思い出す

「高町・・・なのは・・・か」

噂には聞いていたが相当なお人好しの様だ

あれは人の心に何時の間にか勝手に居るタイプの人間は復讐の妨げ
になる可能性が大きい・・・出来るなら遠ざけるべきだ

優しく全てを包むような笑顔・・・今の僕には正直キツすぎる距離を
置いて正解だな

そう思いながら僕は六課を後にし情報を集めに向かった

S i d e ・ ヴ ェ ナ ー ジ

・ 機動六課内：廊下

調べ物が終わって六課に帰ってきた僕は、今日の書類を渡す為に執

務官殿の部屋に向かっていた

…にしても強盗団クズの情報が少なすぎる

「奴らが賢いのか・・・ただ単にマイナーなのか・・・それとも・・・」

管理局なかに奴らの関係者が居て情報操作をしているか・・・だな
まあ・・・いずれはその尻尾を掴んで…必ず斬り刻んでやる・・・そう・・・必ず

「おっと・・・此処だったな」

考えてる内に僕は何時の間にか執務官殿の部屋に着いた
そして僕は数回叩きノックをする

「はい、どうぞ」

「・・・失礼します」

すると中から彼女の声が生がし僕は部屋に入ってしまった

・機動六課内：フェイトの執務室

自分の執務室で仕事をするフェイト

そこにヴェナージが種類を数枚程持ってやって来た

「どうしたの？ヴェナージ」

「・・・執務官殿。今日の分の書類です」

「あ、うん 分かった直ぐにチェックするね」

ヴェナージがフェイトに書類を提出する

フェイトはヴェナージから書類を受け取るとチェックを始めた数分後、チェックが終わってフェイトがヴェナージの方へ向く

「書類、全てチェック終わったよ何処も問題無しだよ。お疲れ様」

「では、失礼します」

「あつ、ちよつと待って《どうしました？執務官殿》あ、あのね・《はい》同じ部隊の仲間なんだし執務官殿のじゃなくて・・・名前を呼んでくれないかな？」

フェイトは部屋を出ようとしたヴェナージを呼び止めた

そしてヴェナージにフェイトは自分の名前を呼んでとお願いしてみるヴェナージの返答は・・・

「・・・どうしてですか？《え...？》お互いを名前で呼び合う程、僕と貴女はそれ程親しくもないでしょう？《そ、それは...そうだけど》なら別に必要無いでしょう？それじゃあ・・・」

「待って！《ちょ》私は、フェイト《...っ！》フェイト・T・ハラオウンあなたは？」

・・・否だった

しかしフェイトは諦めずに立ち去ろうとするヴェナージの服の袖を掴む

そしてヴェナージを自分の方に振り向かせると彼の瞳をじっと見つめながら自己紹介を始めその時、ヴェナージが少し動揺を見せた
だが、フェイトはそれに気付かず再び自己紹介をし次に彼に名前を聞くと……

「ヴェ、ヴェナージ・モルドレイド。これで良いですか？」フェイトさん”／／／”

「うん よろしくね”ヴェナージ”《し失礼しますッ》ふふっ・

その後照れた顔を隠し逃げるようにして執務室を出るヴェナージ
フェイトはその照れ顔のヴェナージを頬笑みながら見送るのだった

Side・ヴェナージ

・機動六課内：廊下

……正直、しくじってしまった

執務官……”フェイトさん”ともある程度距離を置いておこうと思
ったのに……。

あの時の彼女の顔があの人とダブって見えたから……つい許して
しまった

「……お姉ちゃん……」

僕は、一瞬程お姉ちゃんの事を思い出し居ない筈のお姉ちゃん呼ぶ
勿論お姉ちゃんはもう居ないので返事は帰って来ない……そうも
居ないんだ。

「…ちつ、仕方ないか…」

僕は改めて自分の失敗に後悔しながらある場所に向かった

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージは書類を提出した後、シャリーに協力してもらい海上訓練施設で1人、対ガジェット戦の訓練をしていた

「ハアアアアア！！」

『今ので終了です。モルドレイド2等空尉、お疲れさまでした』

ヴェナージの剣が最後のガジェットを切り裂く

そして訓練を終えたヴェナージがシャリーの元に降り立つ

ヴェナージがデバイスを待機状態した後にシャリーがヴェナージに話しかけてきた

「ガジェットはどうでした？モルドレイド2等空尉」

「AIを搭載していると聞いていたから、厄介な物かと思ったけどAIの知能はそれほど高くないだから俺の場合は楽だったな…だが数で責められたら面倒だな」

「AMFは？」

「僕にはあんな物、有っても無くても同じだよ。見てて分かったでしょ？」

「そうですね うふふ……。そうだ 折角だし色々聞いても良いですか？」

訓練を終えたヴェナージにシャーリーは質問を持ちかける
ヴェナージはそれに対し少し悩むが・・・

「・・・あまり気は進みませんが訓練に付き合ってくれましたし少しなら構いませんよ」

「それじゃあですね・・・」

・・・ヴェナージは訓練に付き合ってくれた礼に彼女の質問に付き合う事にした

傍から見れば仲が良さそうな雰囲気を出すヴェナージとシャーリー

「あれはヴェナージとシャーリーか・・・」

偶々通りかかったシグナムに2人が話をしてるのが目に入る
仲良さげに話すヴェナージ達にシグナムは・・・

「アイツ、鼻の下を伸ばしおって……」

・・・ヴェナージと仲良さげに話すシャーリーに嫉妬をして不機嫌になる

その後、暫らくの間シグナムはヴェナージ達の様子を窺ってみる
良い雰囲気の中で会話してる2人にシグナムは・・・

「私も…アイツとあんな雰囲気では話して…って！な、何を言ってるんだ私は！／／／／ はあ…そろそろ行くか、アイツらに何をしてたのかと聞かれても困るし…はあ…。」

そう言って再び歩き出すシグナム

部屋に帰宅した後もシグナムは2人の関係がずっと気になるのだっ
た。。。。。。。

story・2 (後書き)

桃子「今回で2回目ね・・・」

珀狼「そうですね」

桃子「今ヒロイン候補はヴェナージ君をどんな風に思ってるの？」

珀狼「こんな感じですよ・・・」

なのは 仲良くなりたくてヴェナージの事が気になってる

フェイト 気になりかけてる異性

シグナム 既に陥落済み、だが自分の気持ちに気付いていない

珀狼「・・・でおわかりいただけただけでしょうか？」

桃子「うーん・・・分かったような、分からないような・・・もついわ、ヒロインの投票はまだやってるのよね？」

珀狼「はい、次の更新日まではやろうと思います」

桃子「この話の更新日は土曜日で良いのよね？」

珀狼「はい、急用事等が無ければ毎週土曜日の9時頃に更新します遅れてもちゃんと土曜日中に更新できるようにします。」

桃子「それじゃあ、まあ次も頑張りなさい」

珀狼「はい」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

story 3

翌日……。

朝、ヴェナージは書類仕事をしている時

そこにヴェナージが警戒してる彼女がやって来た

「おはよう ヴェナージ君」

「…おはようございます 高町教導官」

「一旦手を止め…いかにも”不機嫌です”と言わんばかりに言い返す
ヴェナージ

そんなヴェナージに屈せずになのはは会話を続ける

「にはははは…。機嫌はどう？」

「最悪です」

ヴェナージは返事を清々しい笑顔でなのはに返し再び手を動かす
そんな彼になのはは頬を膨らませムツとした表情をしてみせる

「もっ〜！どうしてそんな意地悪な事をいうのかな！」

「事実を言ったただけですが？何か？」

可愛らしく怒ってみせるなのは

だがヴェナージの表情は崩れず書類仕事を続ける

そんな彼に対してなのはは、可愛らしくおねだりする感じで再アタ

ツクをする

「ね〜 ヴェナージくん 仲良くしよつよ〜!」

「その内、気が向けばしてあげますよ 《その内って何時なの?》
《7年後くらい》」

「7年!? 六課解散してるよ!? 《そうですね》《そこまで名前を呼ぶの嫌なの!?》《はい》《即答!? ねえ!》《ちょ…!》《どうして!?!》」

なのははヴェナージの両肩を掴みブンブンと揺さぶる

言い返したいヴェナージだが揺さぶられて言い返す事が出来ない
相手を大きな声で威嚇し両肩を掴み激しく揺さぶる…傍から見れば脅迫の様である

しかし、じゃれているようにも見えなくもない…のか?

そんな中、ヴェナージ達の元にもう1人の副隊長の彼女が通りかかった

「ヴェナージ…何をしているんだ?」

「シグナム! 丁度良かった。ここの・教導官を・何とか・し・て・く・れッ」

ヴェナージはシグナムになのはを引き離す様に助けを求める
しかしヴェナージの願いは…

「…知るか」

「そんな〜! シグナムううううう〜!」

・・・儂くも散ってしまうのだった
涙目のヴェナージを尻目にシグナムは不機嫌な様子でヴェナージ達の元を後にした
シグナムが去るとなのは再び彼の両肩を掴み勢いよく揺さぶる

「ねえ！名前で呼んでよ〜！」

「く、苦しいです…高町教導官…」

その後、暫らく2人のじゃれ合いが続いてると・・・

『ヴェナージ・モルドレイド2等空尉…至急、部隊長室にお越し下さい』

・・・ヴェナージに天の助け？による呼び出しがされる
その呼び出しにヴェナージは瞬時になのはの手を離すと・・・

「よ、呼び出されたので失礼します！高町教導官」

「あ！ヴェナージ君！もうツ〜！」

・・・ヴェナージはその場から逃げる様に去って行った

Side・シグナム

・機動六課内：廊下

「はあ〜…」

またやってしまった

私は、ただアイツとなっ仲良くなりたいたけなのに
だが…アイツが他の女性と一緒に居ると無性に腹が立つ

「…一体どうしたんだ。私は…」

本当にそうだ…どうしてしまったんだ？私は…。
自分でもどうすれば良いかが分からない

「…くッ！」

どうすれば良いのか分からない自分に更に腹が立つ
そんな苛立ちの中…私の思考にアイツがなのはやシャーリーと親し
げにしている場面が次々と思ひ浮かんでくる…

「…っ！」

…その瞬間、苛立ち以上に何故か私の胸：いや：“心”が痛んだ
どうして…？何故…？次々に思ひ浮かぶ言葉は私自身を問いただす
しかし、私は自分の事であろうその疑問の答えが出ない

「誰か…教えてくれ…」

私の口から本心が勝手に零れた…。

この苦しみにも似た悩みの正体を私は何時になったら知る事が出来
るのだろうか？

・機動六課：部隊長室

呼び出しに応じ部長室に来たヴェナージ

そこで彼は、はやくからある質問をされるのだった…それは…

「僕の戦闘方法…ですか？」

「うん、そうや自分の部下の戦闘方法を知らんつてのは流石に不味いやろ？それに戦闘時の指揮にも影響するし…だから教えてくれへん？」

…ヴェナージの戦闘方法についての質問だった

その質問にヴェナージは彼女に自分の戦闘方法を教えるべきか少し考えるが彼女の言う事は部長としては当然の事なのでヴェナージはあまり気は進まないものの彼女の質問に答える事にした

「僕の戦闘方法は… です。」

「成程な…という事はヴェナージ君は 主体の って事でええの？」

「そうですね、それで良いと思います」

自身の戦闘方法を語るヴェナージ

そんなヴェナージにはやては他の魔法を使わないのかと質問をする

「他の例えば**攻撃魔法や**魔法とかは使わへんの？」

「一応、ランク試験の対策に覚えてはいますが実戦で**魔法を使った事はあまり無いですね…ましてや**系の魔法なんか試験の時以来、全く使ってませんよ。僕が実戦で主に使うのは基本の**

型の**魔法ですよ…。まあ偶に**系も使いますが…大体、僕の戦闘方法で**系の魔法や**魔法を使っても意味無いですし」

はやての質問である**魔法を使わない理由を答えるヴェナージ
ヴェナージの説明に納得するはやて

そして、この説明後に…

「確かにそうやな…。ありがとなヴェナージ君、戦闘方法については分かったわ…それと、もう1つ程質問してもええ？《構いませんよ》前にシグナムから聞いたんやけどヴェナージ君ってA級デバイスマイスターの資格を持つとるって本当なん？」

…はやては以前シグナムから聞いていたヴェナージがデバイスマイスターの資格を所持している事について確認をする

「本当ですよ。僕のデバイスは自分で組み上げた物ですし」

別に隠すような事でも無いのでヴェナージはそれを肯定する
するとはやては…

「そんなヴェナージ君に頼みがあるんやけど聞いてくれるか？」

…笑顔で頼みがあると言つて来た

はやての笑顔にヴェナージは嫌な予感しかないものの一応、内容を聞く

「…内容によります」

「実は新人達のデバイス作成の手伝いをして欲しいんよ…ダメ？」

「…僕の調べ物の邪魔にならない程度になら手伝いましょう」

ヴェナージの予想に反してはやてのお願いは以外と簡単な物だったしかしヴェナージは任務や仕事以外は調べ物をしているのでヴェナージは、はやての頼みを少し悩み、調べ物の邪魔にならない事を条件にそれを了承した

「それでええよ、ありがとうヴェナージ君」

「いえ、もう行っても良いですか？《うん、ええよ》では失礼します」

その後、質問等を終えたヴェナージは部隊長室を後にした

・機動六課：海上訓練施設

フォアード陣の新人隊員4人が午前の訓練を終えて一旦、隊舎戻つてる頃

ヴェナージは海上訓練施設で昨日と同じくシャーリーに協力してもらいガジェットを相手に訓練を行っていた

『ラスト3ですよ！《了解》』

通信モニターからシャーリーが残りのガジェットの数をヴェナージに知らせる

ヴェナージはシャーリーに返事を返すと再び戦闘に戻った

「あそこか…行くぞ”スレイヴ”」

『Yes, Master.』

ヴェナージはガジェットに近付き……。

ガジェットの手前でヴェナージは自身のBJのサイドスカートの上
部に装備されている予備武装の内の1つ魔力刃サーベルに手を掛け
・
・

「後、2つ……。」

……ガジェットの横を通り過ぎる際に魔力刃サーベルを抜刀しガ
ジェット斬り付けた

その後ヴェナージが通り過ぎた後、ガジェットが爆発する

ヴェナージはそのまま次のガジェットに向かって行く……。

『Approaching missile.』

「数は？《4》叩き落とせるな……。」

ヴェナージはそのまま方向を変えずガジェットに接近していく
それと同時に誘導弾もヴェナージに迫って来る
そしてスレイヴがヴェナージに誘導弾の接近を注意する

『Master.』

「分かってる……はあッ……！」

ヴェナージは速度を落とさずに近付く誘導弾を次々に魔力刃サーベ
ルで切り払いながらそのままガジェットに近付いく……ガジェットも
急いでAMFを展開させようとするが……

「これで、ラスト」

・・・ヴェナージの方が先にガジェットを斬り付けガジェットを破壊する

そして最後の1機に向かって行くヴェナージ

ガジェットも負けじと機体正面の黄色いセンサーから熱線を無数に放ち攻撃する

それをヴェナージは軽々と避けていきガジェットの背後に回ると魔力刃サーベルで後ろからガジェットをまず横に一閃ほど斬り付けて次に身体を回転させ何度もガジェットを斬りつけた…その後、ガジェットは分散しつつ爆発する

「戻るか」

『Yes , M a s t e r .』

訓練を終えたヴェナージは見学者席に居るシャーリーの元に向かった……………。

ガラドスレイヴ 通称：スレイヴ

ヴェナージが独自に制作した少し特殊なデバイス。

ヴェナージは近代ベルカ式なので語源は、ドイツ語の筈なのだが…スレイヴの語源は何故だか英語、制作者のヴェナージはその理由をフレームや武装の部分に金を使い過ぎて語源やその他の部分は安く

出回ってるミッド式の物を採用したとの事

story・3 (後書き)

桃子「今回*や*の表示が多くない？」

珀狼「仕方ありませんよ。隠さなければヴェナージの戦闘方法が丸判りでしたから」

桃子「何時まで隠すつもりなの？」

珀狼「そう長くは、掛からないと思いますよ。それに今回の訓練でかなりヒントが出ましたし分かった人も居ると思います(^^)」

桃子「分からない人は完全公開までお預けって事ね」

珀狼「まあ、そうなってしまいましたが・・・何でそんなに楽しそうなんですか？」

桃子「いえ、別に」ところでヒロインはどうなったの？」

珀狼「その事ですが、投票日を次の更新日まで延ばそう思います。因みに現在は同票ですヒロイン候補はこの3人です」

なのは 仲良くなりたくてヴェナージの事が気になってる

フェイト 気になりかけてる異性

シグナム 既に陥落済み、だが自分の気持ちに気付いていない

桃子「次の更新日も土曜日で良いのよね？」

珀狼「はい、用事等で予定が狂わなければ土曜日の9時頃に更新します」

桃子「ヒロイン決まるといいわね」

珀狼「はい……」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

Story・4

訓練を終えたて見学者席のシャーリーの元に戻って来たヴェナージ
そこで彼を待っていたのは・・・

「お帰り ヴェナージ君」

「はあ…（ああ…そういえば訓練場は、アイツの庭だったな）」

・・・ヴェナージが会いたくない女性だった

なのはを見るなり即行でため息を吐くヴェナージ
そんな様子のヴェナージになのは・・・

「…何かな？その”また出たよコイツ”って感じの顔は!？」

「何故、分かったし」

「むむむ〜！《そんな顔しても…》ふみゃ!?!?!」

・・・少し不貞腐れた顔でヴェナージの表情から考えを読みとるな
のは

なのはに考えを読まれたヴェナージは真顔で驚く

真顔で驚いたヴェナージになのはは両頬を膨らませながら更に不貞
腐れようとするが

その途中でなのははヴェナージに膨らませた両頬を手で軽く引つ張
られ顔を近くまで

引き寄せられ途中で”ある事”を想像してなのはは頬を赤く染め目
を瞑ったが・・・

「…1つも可愛くないぞ《ふ、ふおつとひへよ！／／／》大体、考えが分かつてるなら来ないでいただけますか？た・か・ま・ち教導官殿ツ…！《にヤツ！？／／》ふんつ…！」

・・・ヴェナージの現実味のある言葉に直ぐに夢から引き戻されたその後、両頬を引つ張つてる手を上下に数回振つた後に少しキツく引きながら勢い良く
なのはの頬を引き終えるヴェナージ

「むっ〜！女の子の顔を傷つけたあ！責任取つてよ〜！《それじやあ…結婚でもしてやるうか？》ふえ！？ほ、本当に！？で、でも／／／／／／」

なのはは冗談のつもりでヴェナージに責任を取れと言つたするとヴェナージはその冗談の返事を承諾して返すこれには流石のなのはも動揺したが・・・

「まあ、今はしたくても出来ませんが」

「…………え？《僕は未だ17ですよ》…………ああツ！！《くくつ…》ま、またからかつたね！ヴェナージ君！／／／／／／／／」

・・・またからかわれた事に頬を赤くしたまま怒る
しかし今のなのはは恐いどころか可愛らしいのでヴェナージは必死に笑いを堪える

その後、笑いを耐え抜いたヴェナージは…1服する為に胸の内ポケットから煙草を取り出すのだが…ある重大な事に気付く…それは…

「た、煙草が無い…だと…？」

・・・煙草が切れていた事だった

煙草が切れた事に驚きの色を隠せないヴェナージ

そして、危機迫る顔でヴェナージはなののはに向かつてある事を言う

「高町教官！《は、はい！？／＼／》今直ぐ！僕の為に売店で煙草を買ってきなさい！煙草の銘柄は黒　魔だ、分かった？《はい！》じゃあ！行ってきなさい！」

「わ、分かりましたッ……！」

そしてなのはは走ってヴェナージの煙草を買いに向かった

此処で、なのはとヴェナージの様子を静観していたシャーリーが口を開いた

「……というかヴェナージ君、未だ未成年でしょうに《バレなきやいいんだよ》はあ……。」

「それに細かい事は《良い訳あるかッ！！》……へ？」

『Explosion!!』

「飛竜一閃ッ！」

ブオッ！！

「うをおおおい　　！！こ、殺す気か！？シグナムッ！」

ヴェナージの発言にため息をつくシャーリー

その直後にヴェナージと親しい仲の彼女の怒声＋怒りの斬撃が飛ん

できた

飛竜一閃をギリギリで避けるヴェナージ
因みに飛竜一閃による剣先は明らかにヴェナージの頭部に狙いを絞
っていた

「煩いッ！ 仮にも自分の上司に当たる人物を使いつぱしりにする
など！ お前こそどういっつもりだ！ 《良いじゃん、その位》 良くな
いッ！ そのねじ曲がった根性叩き直してやるッ！ 勝負しろッ！ 《ま
あ、まあ、シグナム落ちて着いて》 放せ！ テスタロッサ！」

「…ヴェナージもシグナムにちゃんと謝って…ね？」

少し後から新人達とヴィータと一緒に来たフェイトがシグナムを抑
えつつ宥める

そして隊長のフェイトに言われてヴェナージも素直に謝ると一同が
思いきや…

「かかってこいや！ このピンクホルスタインッ！！」

…謝らないどころか怒り状態のシグナムに対し挑発で返事を返す
そんなヴェナージにシグナムは当然…

「言ったな！ 勝負しろ貴様ッ！ レヴァンティンの鎧にしてくれる
ッ！」

「上等だ！ ピンクホルスタインッ！ 負けても泣くんじゃねえぞッ
！」

…更に怒りを増し互いに売り言葉に買い言葉が止まらなくなり
遂に2は模擬戦で決着を付ける事になり、2人は即座に騎士甲冑と

B J 展開し訓練場の中央に向かって行った

Side・フェイト

ヴェナージとシグナムが些細な事で…いや、あれはヴェナージの所為だけど…。

と、ともかく！2人が喧嘩をしようとしているのは確かだから

「ともかく私、2人を止め」

「止めずにこのまま見てたらどうですか？フェイトさん」

私が2人を止めに行こうとした時、シャーリーが私を止めた
そしてシャーリーが次に言った言葉…

「このままにしておけばヴェナージ君の強さが見れますよ？フェイトさん」

…”ヴェナージの強さ”この言葉に私は興味を惹かれた
私が皆の様子を見渡してみると…それぞれに興味を示しているのが表情に出ている

そんな皆の顔に私は2人を止めに行くのを思い留まった

そして止めに行くのを思い留まった私に突然…

「…ヴェナージとシグナムどの位、仲が良いんだろう？」

…そんな考えが思い浮かんだんだ

何故、突然そんな事を思い付いたのかは私にも分からない

けどヴェナージとシグナム2人が一緒に居るのが何故だか私は面白くない

前部隊も同じで今も同じ分隊2人が一緒に行動するのは珍しく無いけど……。

2人の事で少し不機嫌な私はある事を思う…それは……

「（もしかして…私 ……）」

……でも、そうだと思うにはまだ早すぎる気がする

だって、私とヴェナージは出会ってまだ1週間も経ってないのだからもう少し考えてみても遅くはない…そんな風に考え…いや、自分に言い聞かせながら私は2人が向かい合ってるモニターに視線を移した

・機動六課：海上訓練施設

訓練場の中央に来たヴェナージとシグナム

2人供、表情は険しく睨み合う

そんな中、突然ヴェナージがシグナムに話しかけてきた

「…おい《何だ》1つ賭けをしないか？」

「賭けだと…？《ああ》何故だ？」

「僕がお前に勝つのは明白な事だし何か1つ余興染みた事が無いと僕がつまんないだろう？それとも《いいだろう》ほう…随分と素直だな《良いから、賭けの内容を言え》」

ヴェナージは挑発気味に賭けをする理由を述べる

この時、ヴェナージはシグナムが反対すると思っていた為に少し驚く

「僕が勝つたら…そうだな僕の言う事を聞くのはどうだ？」

「では、私が勝つたらどうなるのだ？」

「その逆だ、僕がお前の言う事を聞いてやる《分かった》じゃあ、そろそろ始めようか：シャーリー合図を頼む《はい！それじゃあ》…》」

ヴェナージはシャーリーに合図をお願いする

そしてお願いされたシャーリーはノリノリで承諾し・・・

『始め！』

「いくぞ！ピンクホルスタインッ！」

・・・開始の宣言をする

その後ヴェナージは魔力刃サーベルを抜刀、展開しシグナムに向かって行った

「来いッ！今度こそ、お前のそのねじ曲がった根性叩き直してやるッ！」

ヴェナージが魔力刃サーベルを展開した

その後シグナムもLTを展開しヴェナージに向かって行った・・・

story・4 (後書き)

桃子「ヒロイン決まったって?」

珀狼「はい(^^)」

桃子「で、誰?《それは、後のお楽しみという事で! (^|^-)
- 《ふうん》」

珀狼「後、ヒロインは1人ですが、他の候補者だった人物達供一
応、かなり良い、どころか、恋人じゃね?位の雰囲気にはさせます。
でないと物語が進みませんので(^^)」

桃子「ふうん、まあ頑張りなさい、次はヴェナージ君VSシグナ
ムさんね」

珀狼「はい、いよいよ彼の戦闘方法をお見せします(^^)」

桃子「まあ、更新が遅れないように頑張りなさい」

珀狼「は、はい(;・・)」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

story 5

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージは魔力刃サーベルを展開しグナムに接近する

それに対しシグナムもLTを展開し構え接近するヴェナージに備える
そしてシグナムの手前でヴェナージはサーベルを構え・・・

「…このッ！」

・・・身体を回転させながらシグナムの横を通り過ぎながら斬りつけようとする

これをシグナムは・・・

「ええい 《ッ！鞘！》 ツ！」

・・・咄嗟に鞘で防御する

ヴェナージはそのままシグナムの横を通り過ぎると・・・

「…加速」

『 Lightning Rush 』

・・・加速魔法をし凄まじい雷鳴と閃光の後、その姿を消す
姿を消したヴェナージに見学者達は・・・

・海上訓練施設：見学席

見学席にも雷鳴と閃光が見え聞こえる
その後ヴェナージが消え驚くスバル・・・

「キャッ！。。あれ？ヴェナージさんが消えた…？」

「バカスバル、人が消える訳ないでしょ！何か移動系の魔法よ」

「流石ティア！でティアは何の魔法か分かる？へえつとそれは…」

》

・・・そんなスバルにツツコミを入れるティアナ
しかしティアナもどんな魔法かとスバルに聞かれると口籠ってしまっ
そんな時、以外にもシャーリーが口を開き・・・

「あれはライトニングラッシュ、フェイトさんの使ってるブリッ
ツ系の魔法を強化、発展させた魔法って言うても過言じゃない魔法
ね。発動する時、稲妻のような凄まじい雷鳴と閃光が発生するのが
特徴ね…ってあれ？みんなどうしたの？」

・・・ヴェナージの発動した魔法の説明をした
すると一同はシャーリーを見ながら驚いた表情をする
そしてティアナが一同を代表するかのようにはシャーリーに質問して
きた

「シャーリーさん：ヴ、ヴェナージさんと話した事あるんですか
？」

「え…？あ、うん普通に話したりしてるけど？それが、どうした
の？」

ティアナの質問にシャーリーは普通にヴェナージと話しをしたりしてる事を答えると一同は更に驚いた表情を見せる
そして次はスバルがシャーリーに質問をしてきた

「ヴェナージさんってどんな人ですか？」

「えっ…と、カッコイイ系の感じで気さくな…って何で私に聞くの？」

シャーリーは質問に答えてる途中でスバルは何故ヴェナージの事を聞いてきたのが気になりスバルに聞き返した。するとスバルは・

「えっ…と私達ヴェナージさんと自己紹介の日以来、私達が近寄ってもあからさまに嫌な顔をされてまともに話をした事が無くて…」

「それで気になっていたと？《はい…ん…おつかしいな…普通にヴァイス陸曹やグリフィス、アルトやルキノ達には普通に話しをしてるけど…あ！」

スバルは自分達がヴェナージとまともに話をした事が無いとシャーリーに言う

それを聞いたシャーリーは普段のヴェナージからは考えられない様で物凄く困惑した表情をして悩みだす、そして暫らく悩んでると・

「どうしたんです？《スバルちょっと聞くけど》はい…」

・・・シャーリーは何かを思い付いたらしくスバルにある事を聞くそれは・・・”近くになのはが居たか”というものだった

「あのね…スバルが近寄った時って”なのはさん”居た？」

「えっと…確か…居たと思います」

「あ・・・あはは・・・はは・・・。。それであゝ…」

シャーリーの質問にスバルはその時の事を思いだし”なのは”が居た事を伝える

するとシャーリーは苦笑いをした後、納得しスバルにある事を伝える…それは・・・

「あのね、スバル。ヴェナージ君が嫌な顔した理由は”なのは”さんが居たからだよ。ヴェナージ君って”なのは”さんの事が苦手なんだって《なのはさんが？》うん、だから”なのは”さんが居ない時に話しかけてみて、多分普通に話してくれるは・・・ず・・・」

「シャーリーさん？…あ…」

・・・ヴェナージの”なのは”を苦手としている事

それ故に”なのは”が居ない時に話しかければ普通に話してくれるらしい…とシャーリーが理由を言い終わってふと横を見ると…そこには・・・

「…私だけ・・・苦手なんだ…」

「あの！シャーリーさん、ヴェナージさんってどんな戦闘スタイル何ですか？」

・・・ヴェナージの煙草を買って来たのはが立っていた
重苦しい雰囲気か辺りを包む中…エリオが場の重い空気を晴らすか
の様にシャーリーにヴェナージの戦闘スタイルについて質問をした
「う、うん！ヴェナージ君の戦闘スタイルは…目標に高速で一気
に接近し必殺の一撃を叩き込んで撃破してその後、離脱するといっ
た”一撃離脱”の戦闘スタイルだね」

「それって…」

「うん、ヴェナージ君はエリオの戦闘スタイルに似ているんだよ」

「そうなんですか〜！」

エリオは自分と同じ戦闘スタイルの人物が居るのが嬉しいのか目を
輝かせている

そこにキャラがある質問をしてきた

「あの〜シャーリーさん《何？キャラ》ヴェナージさんとフェイ
トさんってどっちが速いん
ですか？」

「バカねえキャラ、そんなのフェイトさんに決まってるでしょ」

「そうだよ、キャラ」

「うん、流石に僕もフェイトさんだと思っよ」

キャラの質問に新人達は次々にフェイトの方が速いという

これにはなのはやヴィータも同意見なのかキャロの意見に若干、苦笑いをするが……

「……速さはヴェナージ君の方が速いですよ？」

……シャーリーの返答は違った

一同は、信じられないという表情をして

「いや、いや、シャーリーさん幾らなんでもフェイトさんよりも速いってのは……」

「そ、そうですよ！そんな訳：《じゃあ、説明してあげる》」

ティアナとエリオがシャーリーに食いかかった

他の人物達もフェイトの方が絶対に速いと思っっている為か表情が険しい

そんな中、シャーリーはヴェナージの速さの説明を一同にし始めた

「恐らくフェイトさんとヴェナージ君は元々は同じ感じの資質を持った魔導師だったのだと思います、それでフェイトさんは高い機動力を生かしつつも、全距離に対応できるオールレンジアタッカーに成長したのに対しヴェナージ君は持っていた高い機動力を重点に強化していく事でフェイトさんをも凌ぐスピードを獲得した訳、分かった？」

「なっ、成程……」

「……（ヴェナージって私よりも速いんだ……今度模擬戦に誘ってみようかな）」

シャーリーの説明が終わり一同がヴェナージの速さに納得してる時に、その中で約1名：フェイトはヴェナージを模擬戦の相手に狙いを定めていた

一方、その頃：模擬戦中のヴェナージとシグナムは・・・

・機動六課：海上訓練施設

・・・ライトニングラッシュの効果で消えたヴェナージ

それに対してシグナムは目を瞑ってLTを構えヴェナージの気配を探ってみる

「（…気配はある…が…流石に正確には捉えられないな…なら、炙り出してやるか）…レヴァンティンツ！」

『Schlange form.』

シグナムはLTをシュランゲフォームの状態にして下のビルを自分を中心に次々に円形状に斬り付ける…斬り付けられたビルは次々に倒れてシグナムの周囲に大量の砂塵が舞い上がり周囲を包んでいく…その時、僅かに砂塵が不自然な舞い方をする

そしてシグナムは不自然な舞い方をした方にLTの剣先を投げつけ

・

「そこか 《なっ!?!》 ツ！」

・・・ヴェナージを炙り出した

予想外の攻撃にヴェナージは思わず足を止めた、シグナムはその隙にLTをシュベルトフォームに戻すと追撃を与える為にヴェナージ

に向かって行く

『Explosion.』

「紫電いつ 《クツ!》 なッ!？」

シグナムは炎を纏わせたLTを左から右にかけて振り抜く!

それをヴェナージは身体を後ろに逸らせてそれを避け更に身体を左に回転させながら

シグナムの間合いから離れると魔力刃サーベルを腰に収め・・・

「
∴ ガラドスレイヴセットアップ」

『Set up.』

・・・スレイヴを起動した

ヴェナージの指示により基本形態に起動したスレイヴ

その刀身は見る者を魅了するかの様な黄金の輝きを放っている

「ようやく”スレイヴ”を出して来たな・・・」

「まあな∴これ以上続けば”全てを出しそう”だからな∴そろそろ、決めさせてもらう」

『Load cartridge.』

ヴェナージがスレイヴを出して来た事でシグナムの顔が真剣になる
そしてヴェナージはシグナムに返答した後∴カートリッジを補充させ
スレイヴの黄金の刀身に雷を纏わせてスレイヴを構える

・・・その後、数発の魔力弾を零距离で発射する
発射後に煙が巻き起こるその中から、意識を失ったシグナムが落ちていく・・・

「よつと...」

・・・落ちていくシグナムに41を向け発射
41の銃口から魔力ワイヤーを射出
射出されたワイヤーはシグナムの身体に巻き付け落下を阻止する

「重つ...」

その後、ヴェナージはシグナムをぶら下げたまま見学者席に戻って行った・・・。

story.5 (後書き)

桃子「今回で5回ね」

珀狼「そうですね(^^)」

桃子「今回は少し長めね」

珀狼「本当は2話編成にしようと思いましたが2話編成だと片方が短くなってしまうので1話で纏めました、それで少し長めになってしまったm(____)m」

桃子「そう、それじゃあ今回はこの辺で!」

珀狼「それでは!(^^)」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

story・6

・海上訓練施設：見学席

戦闘を終えたヴェナージは41のワイヤーでシグナムを巻き付ける
そしてぶら下げたまま見学者席に帰ってきた

「ふう〜…到着つと、結構重かったな、胸の所為か？さてと、ワイヤーを回収つと・・・」

「ヴェナージ君！」

「どうしました？」微妙な大きさの胸”約して”微乳”のなのは
さん！」

ヴェナージがシグナムに巻きついたワイヤーの回収している
するとそこになのはが声を掛けてきた
ヴェナージは、なのはに付けたあだ名？で返答した、そのあだ名？
になのはは・・・

「まずは、はい煙草《ども》そ、それと！びび微乳つて何かな
！？とつても恥しいんだけど！？《良いじゃないですか、別に》よ
くないよ！／＼／＼」

・・・顔を真っ赤にしながら自分についたあだ名？に反論する
なのはが近くで反論する中、ヴェナージは黙りながら先程なのはに
買って来てもらった煙草を開封し、それを1本程口に咥え火を点け
吸い始める

・・・ヴェナージはそつとお姫様だつこをして抱き上げる
その光景に一瞬、思わず息を飲むフェイトと一同
その後フェイトはシグナムをお姫様だつこする理由をヴェナージに
尋ねる

「ヴェ、ヴェナージ…ど、どうしてシグナムを”そついう風”に
持つの？」

「これですか？《うん…》それは…背中に背負った方が彼女の胸
が僕の背中に当たり
僕としては”色々”と嬉しい限りなんですが…その場合だと、彼女
が目覚ました時に確実に僕の命が危険になるので”こついう風”
にしたのですが…？いけませんでしたか？《なら…いいけど…》な
ら、医務室に連れて行きますね」

「う、うん…分かった」

ヴェナージはそう言ってシグナムをお姫様だつこしたまま訓練施設
を後にした

Side・シグナム

・?????????

「う、うん…此処は…？」

私は…確か、ヴェナージとの模擬戦で倒された筈、だが…。
それに…此処は何処だ？少なくとも私の部屋では無く…部屋の雰囲気
気からして医務室でも無いな…。

「…ん？これは…」

・・・起きあがって周囲を見渡すと写真立てが目に入った
どうやら家族の集合写真の様だ：よかったこれで誰の部屋か分かる
事が出来る

そう思いその写真を良く見てみると・・・

「ヴェナージ…」

・・・それはヴェナージと彼の家族の写真だった

この集合写真のヴェナージは見た限り大体、9歳前後というところか

「これが、ヴェナージの姉か：成程、アイツがなのはを苦手にする訳だ」

写真に写るヴェナージの姉の顔は少し前のなのはに何処となく似ているな

奴が語った数少ない昔話に姉の事を言った話の話が記憶が甦る

『姉…？《そつ》お前、姉が居るのか？』

『…正確には”居た”んだけどね…僕の事は何でも分かってしま
う究極のお姉ちゃん結局、一度も驚かす事が出来な…いや、最後の
時は驚いていたな…』

この時のヴェナージの顔の影が悲しみに満ちていたのを私は見逃さ
なかった

その後…私は、奴の”姉が居た”という言葉と悲痛の表情が頭に残
っていたいけない事と知りつつも私はヴァイスと一緒に奴に内緒で奴

の経歴を調べる事によってその発言の意味が分かってしまった

…ヴェナージ 奴にはもう家族が居ないのだと…

私達はヴェナージに経歴を調べた事を言った

幾らかの咎めを覚悟していた私達だったが奴は

『あつそ…』

たったそれだけだった

私とヴァイスは慌てて奴にそれで良いのか？と言つと…

『別に君達が勝手に僕の経歴を調べようと…僕の復讐すめごとは何一つ変わ
らないから』

…私は奴の言った” すること ” に一抹の不安覚えたが聞かなか
った

いいや、違う聞けなかつたんだ

今の私とヴェナージの関係が崩れそうだったから
そんな事を思い返してると…

「ん…？起きたのか？」

…部屋の主〃ヴェナージが帰って来た…もう少し後でも良いのに
そうすれば奴と一緒に…いや、止そう

奴は私が起きてる事に気付き声を掛けてきた

…
・機動六課：ヴェナージの自室

「お前が私を部屋に連れ込んだのか？／／／」

シグナムは顔を赤らめつつ問いかける

するとヴェナージは呆れた表情を見せた後に懐から煙草を取り出しそれを吸い始める

そして煙を吐き出すとヴェナージは喋り出した

「フー……。全く、人聞きの悪い……僕は模擬戦後に君をシャマル医務官の居る医務室運んだだけじゃ無く診察後も君を君の自室まで運び部屋に鍵が掛かっていたからまた君を担ぎこの部屋まで運んで僕のベッドで寝かせてあげたというのに」

「そうか……ところでどうやって担いだんだ？《俗にいうお姫様だっこ》なっ！？／／／／／」

シグナムは運ばれた方法を聞き顔を真っ赤にする
部屋にあるテーブルに置いてある灰皿に灰を落とすヴェナージ
そして赤面のシグナムにお構いなしに話を続けていく

「……それで人の家族写真がそんなに珍しかったのか？何ならあげようか？家族写真《なっ！？》冗談だ……他の写真は家と一緒に燃えちゃってそれ一枚しか見つける事が出来なかったんだ頼んでもあげないよ」

「……そういう事は冗談でも言うもんじゃない《ほつとけ》……」

ヴェナージの棘のある言い方に黙るシグナム

少し間、重い雰囲気の流れた後何時までも帰らないシグナムにヴェナージが口を開く

「……まだ用があるの？《……》黙ってたら分かんないんだけど」

「それでは…聞いても良いか？《何を》お前は、私が普通の人間ではない事を知ってるな？《フウー…》。…それで？》それで主はやての知り合いの博士セシイ・ドライという人物がな…。」

「！！？（セシイ・ドライ！？…デバイス製作に関しては世界でも指折りの製作者でもそれだけでは無くそれと同時に医療の権威でもある天才…現在はポインクセル王国の王子の元に嫁ぎ名を変えたと聞いたが…まあどっちでもいいか）」

下を向きながら話すシグナムの口から”セシイ・ドライ”というビツグネームが出た事に一瞬だが流石のヴェナージも表情を変える程に驚いてしまった

そしてシグナムは驚くヴェナージを余所に話を続ける

「…私にいや私を含めヴィータやシャマル達に”普通の人間になるか？”という提案をしてきたんだが…どう思う？」

「何でそんな事を僕に聞くの？そういうのは自分で」

「自分で決められなく悩んでいるからこうして聞いているんだ…」

…なら、普通の人間になればいいじゃん…

シグナムの真剣さに諦めたのかヴェナージは煙草の火を消し意見を言い始めた

急に言い始めた為にシグナムは少し間抜け表情をしながらも耳を傾ける

「…何かをやらずに後悔するよりやって後悔する方が何倍もマシだと僕は思うけどねまあ、これは僕の意見だし君がどうするかは知らないけどね…こんな感じでいいか？」

「す、すまない参考になった／＼／」

「…だったらもう帰れ、僕は眠いんだ《冷たいな》おい、ベッドを盗るなよ」

ヴェナージが帰る様にシグナムに言う

すると何故かシグナムは先程寝ていたヴェナージのベッドで横になり布団を掛ける

「今日はもう遅いし此処で寝ようと思ってるんだが？《帰れ》断る」

ヴェナージはシグナムが掛けている布団を剥ぎ取ろうとするもシグナムが何故か必死に抵抗する為仕方なくヴェナージは…

「…解せぬ」

…ソファアーの上で横になり寝る事にした

翌日、シグナムは早速自らの意見をはやてに言いその後、数日の休暇の申請

そして2日後、彼女は六課を一旦離れセシイの居る王国に向かった言うまでも無いが、その数日の間シグナムの代わりはヴェナージになる

だが彼は…

「…え？何で…？」

・ ・ ・ と、あまり納得していない様子だった。 ・ ・ ・
・ ・ ・ 。

story・6 (後書き)

桃子「何とか間に合ったわね」

珀狼「は、はい…。 (; ;)」

桃子「さて…今回は、えっと…シグナムさんが人間になるって事なの？」

珀狼「はい、理由は今のところ言えませんがね」

桃子「ふ〜んで、次回は？」

珀狼「このシグナムの居ない数日、彼が教導に参加する話にしようと思います」

桃子「そう、それじゃあ頑張りなさい」

珀狼「はい (^ ^)」

桃子「物語の感想とかまってるわ〜」

story 7

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージの助言？で人間になる事を決意したシグナム

その彼女は現在、ポイニクセル王国のセシィ・ドライ博士に処置を受けている

表向きは王国に数日程旅行に行った事になっている
そして・・・

「で、何する？」

「ば、僕に聞かれても・・・」

・・・ヴェナージはシグナムの代役を強制的にさせられていた
そして今日は同じ分隊のエリオの指導に来たのだが・・・

シグナムとは違いヴェナージは訓練は元より新人の模擬戦相手としても顔を出したりしていないので・・・何をしたらいいか考えていた

「・・・サボる？」

「ダメですよ！それは！《え〜》《え〜》じゃなくて！！」

「真面目君め・・・大体、僕は1度も君達の訓練見た事無いから分かんないよ・・・あ、そうだシグナムは訓練に参加した時は何してたの？」

ヴェナージはエリオにシグナムとの訓練の様子を聞く

するとエリオは少し考えた後に答え始めた

「シグナム副隊長は偶に模擬戦の相手をしてくれに来てくれますよ」

「模擬戦かよ…。《はい!》何故、元気よく答えるの?僕にやれつてか?」

「え…?してくれないんですか!?《しません》そんな…。」

シグナムと違いヴェナージは模擬戦の相手をしてくれず落ち込むエリオ
落ち込むエリオを見てヴェナージは

「(コイツ戦闘狂かよ!?うちの隊長といい副隊長といいスターズの新人もそうだっけ?ともかくホント此処の部隊はこんな奴ばっかだな!)」

自分の分隊に居るバトルマニア達の所為で少し自分の感覚を疑うヴェナージ

金髪のアホ毛巨乳の隊長は『戦^やろう?ヴェナージ』と背後から突然声をかけてくる

これは最近のヴェナージにとって軽いホラーである

「全く…ん?…なあ、モンディアル」

ヴェナージはエリオの親譲りの戦闘狂の部分に呆れて目線を逸らし余所を向くと、ふとヴェナージは訓練前に飲んだスポーツ飲料が目に入った

「はい、何でしょう?」

「お前、……って知ってるか？」

「はい？」

エリオはヴェナージのある質問に首を傾げてしまった
ヴェナージの質問とは……？

・機動六課：海上訓練施設（なのは組）

ヴェナージがエリオに質問をした少し後、なのはの指導の元別の場
所で訓練をしている

新人4人のリーダー的存在のティアナともう1人のライトニング分
隊のキャロ

「次、いつくよ〜！」

「「はい！」」

なのはの魔法弾が数発2人に向かって行く
それを次々に捌いて行くティアナとキャロ、その捌いた魔法弾の1
つが奥の方へ向かって行くが…何故か撥ね返って来た、2人は何と
か勿ね返った弾を避ける

B l i t z k n i f e .

「ハア…ハア…ど、どうして？」

ティアナが息を切らしながら弾が撥ね返って来た方を見る
すると、その方角から両手に数本の魔力光で出来た投擲剣を装備し
たヴェナージが姿を見せた。その後、ティアナ達の前に来るとヴェ
ナージは投擲剣を収める

「やれやれ…後、もう少しで直撃だったな…危ない、危ない」

「どうしたの？ヴェナージ君、エリオとの訓練は？」

なのははヴェナージにエリオとの訓練の様子を窺う
すると面倒臭そうにヴェナージはそれに答え始めた

「言われなくてもちゃんと、やってるよ。面倒臭い女性だねホン
ト」

「むっ…どんな訓練をしてるの？」

「かくれんぼ」

「か、かくれんぼ！？ど、どうして!？」

なのはは少し不貞腐れた表情をしながらエリオとの訓練の内容を聞く
その内容は”かくれんぼ”だった
内容が内容だけに驚くなのはとティアナ達
するとヴェナージはため息をついた後理由を話し出した

「…搜索能力の向上の為…？」

「聞かないでよ」

「いや、だって何したらいいか分かんかったし」

「模擬戦とかは？」

「模擬戦…？プツ…アハハハ！僕がやったら只の弱い物イジメだよ」

なのはがヴェナージにエリオと模擬戦でもしてみたらと提案する
だがヴェナージはそれを笑いながら否定した

「モルドレイト副隊長！」 「キャラ？」

「ん？誰だっけ…あ、確かるルル…ルシエ3士だったよね、で…
何かな？」

ヴェナージが笑っていると突如その笑いを遮る声が出た
その声の主は、同じ分隊のキャラだった、キャラは険しい表情で言葉続ける

「エリオ君はそんなに弱くありません！戦っても《だったら戦つてあげようか？》え…？」

キャラはエリオの事を笑ったヴェナージに怒声をぶつける
しかしそれは途中でヴェナージに遮られる
その後、言葉が続けていくヴェナージ

「その代わり…僕が満足しなければ《ど、どうなんです…？》
此処であのガキを潰すけど良いかな？一応、殺さないけど…、それ以外は保障出来ないよ？僕、こっ見えても結構沸点低いし、これ脅

しじゃないから ヴァイス辺りに聞けば分かるよ」

そう言うヴェナージの目は、キャロでも分かるほど凄まじい殺気を放っていた

近くの居るなのはもヴェナージの目に圧倒され声を出せない
ティアナは全身から冷や汗が噴き出す様に出るのを感じた
そんな中、キャロは・・・

「きよ、局の人がそんな事言つて良いんですか!？」

「構わないさ」

・・・必死に抵抗する様にヴェナージに言い返す
だが、キャロの抵抗はあっさりとへし折られた
その後、ヴェナージは先程とは比べ物のにならない位の殺気を目に
込め

「…僕は、正義とか秩序とか…そんな言葉、言うだけで虫唾が走る程に大嫌いなんだよ僕が管理局に”居てやる”理由は他にありません、他つて」教える義理は無いね」

そう言うと、ヴェナージは向きを変えなのは達の元を去って行った
ヴェナージが去った後、ティアナ達はその場にへたり込み、なの
も呆然と立ち尽くし

皆、暫らくの間、その場を動く事が出来なかった

・機動六課：海上訓練施設 (ヴィータ組)

「(あの程度の殺気で立尽くしゃへたり込むとは…大した事無い

な) …ん？あれは」

なのは達の元を去ったヴェナージ
煙草を吸いながら歩いているとヴィータとスバルの訓練が目に入っ
て来た

「いくぞーアイゼンツ！」 『Jawohl.』

『Protection.』

ヴィータはアイゼンを振りかぶると

シールドを展開してるスバルをシールド越しに叩く
アイゼンの威力に押されて砂埃を出しながら後ずさるスバル
そんな2人の訓練の様子を見たヴェナージは・・・

「うわゝ…過激だねゝ…」

・・・他人事のような発言を言っていた
すると、ヴィータがヴェナージに気付き近寄って来た

「エリオとの訓練はどうしたんだ？ヴェナージ」

「今、訓練のかくれんぼしてる最中」

「…何でかくれんぼなんだ？」

「め…他に思い付かなかったから、こつしてかくれんぼしながら
他の人を見て参考にしようと思って歩居てるって訳」

ヴィータがヴェナージにエリオとの訓練の事を聞いてきた

なので正直に？ヴェナージはヴィータの質問に答えた

「剣の打ち合いでもしてれば良いんじゃないかねえのか？《ダメだ》どうしてだよ？」

ヴェナージの答えにヴィータは少し呆れつつも訓練の提案をしてくれた

だが、ヴェナージはその提案を即答で断る

流石に即答での断った為にその理由を聞くヴィータするとヴェナージは少し、険しい表情をしながらこう答えた

「エリオに怪我をさせたら隊長に殺される^{フェイトさん}」

「そんな訳《あるッ！》うおっ！？」

ヴェナージの良い訳に呆れるヴィータ

戻って来たスバル近くで苦笑いを浮かべている

その後、ヴィータがヴェナージの意見を否定しようとする急に強くヴィータの言葉を遮る

急に強い声を上げるヴェナージに驚くヴィータ達

ヴェナージはヴィータの両肩に手を置くと・・・

「そんな訳ある！あの人マジで恐いんだよ！というか、何であるに恐いの！？本当に意味分かんないんだけど！？」

「お、落ち着け！後、近い、近い！／／／／／／／／」

「わあ／／／／」

・・・肩を揺らして必死に訴える

無我夢中で顔が近い事に気付かないヴェナージ
見方によってはキスをしてると勘違いしてもおかしくない程、現に
1名既に勘違いしてる
そんな状況の中・・・

何をしてるのかな？ヴェナージ

「た、隊長！？…《ヴェナージ？》ふえフェイトさん」

・・・恐い人がエリオと一緒に現れた

フェイトの登場で顔が一気に青くなるヴェナージ
笑顔？のフェイトはヴェナージへの質問を続けていく

「うん … それでヴィータと何をしてたのかな？」

「な、何もしてませんが《嘘はダメだよ？》いや、本当ですよ！
？」

「分かった 《何故、バインドで縛、ムグツ！？》ちょっと一緒に
来ようか」

そして恐い人はヴェナージの全身をバインドで拘束した後、ヴェナ
ージを引き摺りながら奥の方へと消えていった……………
……………

story・7 (後書き)

桃子「今回は日常って感じね」

珀狼「そうですね」

桃子「次話はどうなるの？」

珀狼「更新はするかどうかはTPP次第でしょうね、こればっかりは」

桃子「そうね、それじゃあ！今回はこれで」

桃子「物語の感想とかまってるわ」

Story・8

・機動六課：休息室

シグナムが帰って来て数日後

ヴェナージは休息室でヴァイスと雑談していた

そんな中、ヴァイスはある質問をヴェナージにしてきた

「…彼女？僕が？冗談でしょ？」

「イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？」

にやけた顔でヴェナージにそう言うヴァイス

そんなヴァイスに対してヴェナージは呆れ顔で質問に答える

「もしそうだったらもう作ってるっの！…大体、こつこつ事に

関しては君の言う事は少しずれてるよ《そうか？》そつだよ、全く」

「アツハハハハ！違いねえ！」

「笑う事無いだろう…！」

そんな感じに雑談を楽しむ2人

だが、この雑談を盗み聞きしてる人達が居た

Side・なのは

さて種類の整理を終わったし教導に戻らないと

ん？ヴェナージ君とヴァイス君の声だお話してるのかな？

『…彼女？僕が？冗談でしょ？』

彼女！？一体どんな会話なの！？

これは、是が非でも聞かないと・・・えっと、此処に隠れてつと・・・。

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

ヴァイス君、何言ってるのかな？撃つよ？

ヴェナージ君を惑わすような事は止めて欲しいんだけど・・・？

『もしそうだったらもう作ってるっーの！・・・』

ええ ツ！？

そうなの！？私、あんなに頑張ってるのに！酷いよあゝ・・・。

んゝでも、私嫌われてるし・・・どうしよう？アレ・・・何か忘れてるよ
うな・・・。

「あ・・・！早く戻らないと！！」

い、急いで訓練施設に戻らないと！

Side・フエイト

今日はこの後、外回りのついでにはやてを聖王教会に送るんだった
まだ少し時間あるけど早めに迎えに行こうかな

『…彼女？僕が？冗談でしょ？』

・・・どういうことかな？

ヴェナージに彼女？まさか…あ、やっぱり違うんだ、よかった

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

…………… ナニヲイッテルノ？ヴァイス

ヴェナージを変に惑わさないで欲しいな…ん？ヴェナージがモテる…？これが本当なら

急がないと…えっと何をだろう？えっと…もしかして…。

「私、ヴェナージの事好きなのかな…？／／／」

うん、多分そうなのかもしれない

でも…どうすればいいんだろう？鱈！？違う！ききキス！？それともデート！？

『もしそうだったらもう作ってるっの…！』

え！？そうなの！？でも…私、多分それなりにアタックしてると思うんだけど…。

どうして…まさかヴェナージって鈍感？

だったらもつと積極的にアタックをかけて…

「おいフェイトちゃん」

・・・あ、はやて…忘れてた

い、行かないと…／／／

Side・シグナム

折角、ちゃんとした人間ひとになって戻ってきたというのに……。あの馬鹿ときたら……

『よかったね!』

……それだけかつ!

もつと他に掛ける言葉があるだろうが!全く……。

まあ、アイツにそんな事を期待しても無理か……。ん?これは……あの馬鹿とヴァイスの声か

あいつら雑談でもしてるのか?少し行ってみるか

『……彼女?僕が?冗談でしょ?』

か、彼女だと!?そんな馬鹿な!?……ああ冗談か……全く紛らわしい!思わず、壁に隠れ盗み聞きする感じになってしまったと、取り敢えずこのまま様子を窺うか……

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう?』

……何故、貴様ヴァイスがそんな事を知っている?

というか……そうなのか?アイツは言う程に女性に人気があるのか!??

知らなかった……た、確かによく女性局員からヴェナージの名前を聞くが……。

『もしそうだったらもう作ってるっの!……!』

そ、そうだよな!うん!焦ってしまったぞ……。

でも……イロイロと急がないといけない様だなこれは……

きよ今日の夜……少し頑張ってみよう!/!/

・機動六課：休息室

「…ところでヴェナージお前、好きな女のタイプって居るか？」

盗み聞きしてる人達が去って暫らく経ち

雑談メンバーも1名グリフィスが増えて3人で雑談をしていると・・

ヴェイスがヴェナージに好きな女性のタイプの事の聞いてきた

「…何でまたそんな話しを？」

「それは僕も知り《君はルキノとイチヤついでれば良いよ》な！
？／／／／」

ヴェナージは冷たい視線でヴェイスに理由を聞く

ヴェイスと一緒にたがって知りたがってたグリフィスをヴェナージは一言で黙らせる

「グリフィスの野郎の話は後で聞くと《聞かないで下さい！／／
／》嫌い！このムツツリスケベ《ムツ、ムツツリ！？》で、どうなんだ？好みの体型とか性格とかは？」

ヴェイスに”ムツツリスケベ”と言われ慌てふためくグリフィス
そんなムツツリを放って置きヴェイスはしつこくヴェナージに女性
のタイプを聞いてくる

「…ハア…。答えないとダメ？《ダメだ》好きな体型？ねえ
…ん〜フェイトさんかな」

ヴェナージは遂に折れてヴァイスの質問に答えた彼の好きな体型？は同じ分隊の隊長のフェイト・T・ハラオウンとの事

この答えにヴァイスはイヤらしい笑顔で・・・

「ほう〜フェイトさんか、イイ線選ぶね〜」

・・・と答えるこれで終わるとヴェナージは思ったのだが、ヴァイスはイヤらしい笑顔をしたまま・・・

「で？性格は？《ええ〜…》ええ〜…じゃねえよ。ほら答える」

「性格は…」

・・・話を続けてきた、これで済むと思ってたヴェナージは肩を落とす

仕方なくヴェナージは面倒臭そうな顔をしながらその質問に答えようとした…その時・・・

『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』

・・・警報が鳴りモニターに”一級警戒体制”のアラートが表示される

雑談メンバーは雑談を止め仕事モードに切り替え・・・

「…お仕事だね」

「そうみたいです」 「よしッ！行くか！」

・・・ヴァイスの掛け声で席を立ちあがり
ヴェナージとヴァイスはヘリポートへ、グリフィスは指令室へと向
かった

・上空：ヘリ内部

六課の新人達の初ガジェット戦：新人達は初めての本物のガジエ
トと良く善戦中
それなのに副隊長のヴェナージはその様子をヘリの内部のモニター
から観戦していた

「・・・お前も仕事しろよな」

そんなヴェナージにヴァイスが突っ込むように言う
ヴァイスが突っ込みに対して煙草を吸いながら観戦客気分のヴェナ
ージは・・・

「僕は部隊長の命令で補欠だよ 行きたいのだけど仕方なく、
此処に居るんだよ」

「うわあゝ嘘くせえゝ・・・」

・・・素晴らしい笑顔ではやての命令で自分は仕方なく此処で待機
してると言う

ヴァイスは嘘くさいと突っ込む、そうしてる間に新人達はガジエッ
トの破壊に成功し目標のレリックを回収してヴェナージもこれで帰
れると思った・・・その矢先・・・

『ヴェナージ君、ガジエットの後続部隊が接近中や！迎撃に行ってくれるか？』

・・・はやてがガジエットの後続部隊が接近してる為ヴェナージに
出動要請をする

その出動要請にヴェナージは・・・

「ええ〜…《そ、そんなに嫌がらんでも…》だって…ねえ」

・・・あからさまに嫌そうな顔をする

そして不貞腐れた顔のままヴェナージは・・・

「代わりにフェイト隊長に行ってもらいましょうよ それが良い
ですよ《給料減らすで？》麗しき我が主よ、この下僕めになんなり
とお申し付け下さいまし」

・・・自身の代わりにフェイトに行ってもらおうと提案

ヴェナージの提案に呆れたはやては、給料カットをチラつかせると
彼は…モニター越しのはやてに向かい膝き目をキリツと輝かせ先程
とは真逆の返答をする

そんなヴェナージにヴァイスとはやての2人は間の抜けた表情で目
が点になる

『はあ…取り敢えず、後続ガジエット部隊の殲滅よろしくな』

「お任せあれ、麗しき我が主。ヴァイス！《お、おう！》では、
行つてきます」

ヴェナージは煙草を携帯灰皿で消した後、ヴァイスがヘリのハッチ
を開ける

その後B」に身を包みヴェナージは・・・

「・・・ライティング05、ヴェナージ・モルドレイト・・・出るッー！」

・・・ヘリから飛び出した

そして大空を舞うように目標に向かっていった・・・
・・・
・・・。

story・8 (後書き)

桃子「グリフィス君が出てくるとは・・・以外ね、アレ？そう言えば彼って本編じゃあ・・・確かフェイトちゃんと通信してなかった？」

珀狼「そうですね、ですが此処での彼はヴェナージとヴァイスと一緒に雑談してるという事になってます(^^)彼は、ヴェナージの友人としてヴァイス程ではありませんが偶には話に出てきます、主に雑談の時だけです(笑)あ・・・因みに、あの時フェイト通信したのはルキノさんです(^^)」

桃子「ぐ、グリフィス君に出番。ですって・・・？(。。(。)...!？」

珀狼「な、何もそこまで驚かなくても良いと思いますけど・・・」
「(。)」

桃子「おっほん！気を取り直して・・・次回は？」

珀狼「この続き、ヴェナージのガジェットとの初戦闘を書きます」

桃子「そう、それじゃあ頑張りなさい」

桃子「物語の感想等待着てるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1892x/>

金の閃光のもう一人の義兄Another外伝：Avenger story.

2011年11月19日10時55分発行